

残留日本兵と

陛下のベトナム訪問

編纂委員会

●残留日本兵

アジアや太平洋の各地に駐留した日本軍将兵は、1945年8月の終戦により現地地で武装解除、除隊とされ、日本政府の引き揚げ船などで日本へ帰国し復員した。しかし、その一方で様々な事情から連合国軍の占領下におかれた日本に戻らず、現地での残留や戦闘の継続を選んだ将兵も存在した。

その理由は次のようなものであった。

① 終戦を知らされず、あるいは信じられず現地地で潜伏し作戦行動を継続したものの。

② 第2次世界大戦後、欧米諸国の植民地に戻ったアジアの各地で勃興した独立運動に身を投じたもの。

③ 市街地への空襲や原子爆弾による日本本土の惨状を伝え聞き、家族の生存や帰国後の生活を絶望視したものの。

④ 現地人と婚姻関係を持ったもの。

⑤ 日本で戦犯として裁かれることを恐れたもの。

その他、多くの理由により日本本土への帰国を断念し、現地にて生活基盤を築くことになった。なお、日本国政

府は彼らを「脱走兵」扱いとし、軍人恩給も死後の遺族恩給も支払っていない。

日本軍がフランスの植民地だったインドシナに進駐したのは、1940年である。終戦時約8万人いた軍人の大半が撤収するなか、約6000人の日本兵が留まった。ホー・チ・ミンらが率いる「ベトナム独立同盟」(ベトミン)に参加するためだ。再植民地化をもくろむフランスとの戦いで、約半数が亡くなったとされる。

ベトナム独立戦争中、日本人志願兵は「新ベトナム人」と呼ばれ、ベトミンに軍事訓練を実施し、作戦指導を行った。1946年に設立されたクワンガイ陸軍中学などいくつかの軍事学校で旧日本陸軍将校・下士官による軍事教育が行われ、1954年にベトナムがフランスを破った「ディエンビエンフーの戦い」では、司令官の参謀の半分を日本兵が占めていた。

戦後、30名を上回る日本人がベトナム政府から勲章や徽章を授与されていることが確認された。戦死した旧日本兵には、烈士墓地に顕彰されているものもある。

●戦後の残留日本兵

元日本兵は「新ベトナム人」として現地で歓迎され、ベトナム人女性と結

婚した人もいた。だが、ベトナムの政治体制や生活風土になじまない日本人は徐々に冷遇され、帰国を促されるようになる。フランスとの戦争が終結した1954年から元日本兵の帰国が始まったが、当初、ベトナム側は妻や子を同伴しての帰国を認めなかった。

前大戦の侵攻などによる日本の悪い印象が残る時代でもあり、元日本兵との関わりを隠して暮らす妻や子もいた。ベトナム戦争で北ベトナムを攻撃した米国と日本が同盟関係にあったことも、残された家族の境遇に影響し、就職などで差別を受けることもあったという。

日本との関係が改善されるのは、90年代に入ってからだ。今やベトナムにとって最大の援助国であり、両国は「戦略的パートナーシップ」を謳(うた)う関係である。日本語学習熱も高まり、日本に留学する学生は、中国に次いで2番目に多いそうだ。

「新ベトナム人」が果たした功績も、正当に評価されるようになった。

●天皇陛下のベトナム訪問

天皇・皇后両陛下は、東南アジア諸国も積極的に御訪問された。国内の戦没者だけでなく、国外の戦線で犠牲になった人々にも祈りを捧げてこられた。

冷戦で歴史に埋もれていた。

ベトナムを御訪問された天皇、皇后

両陛下は3月2日、大戦後のベトナム

に一時期とどまった元日本兵の家族

と、首都ハノイで面会された。現地では

元日本兵がベトナム人女性と結婚し

て家庭を築いた後、帰国したことによ

り残された妻や子が困難な生活を余儀

なくされたこともあった。苦難の歴史

を熟知されている両陛下は、残留日本

兵の妻たちと初めて対面し、苦難の人

生をねぎらわれた。

予定時間を大幅にオーバーしたが

「少しでも多くの人と長く話し、相手

に寄り添いたい」という御気持ちから、

ほぼ全員と話された。

両陛下が関連施設を御訪問された

り、残留元日本兵家族と面会されたり

したことで、こうした秘められた日本

の歴史が鮮やかに照らし出された。

天皇陛下の御希望で決まった今回の

面会は、「戦争に振り回され、家族の

消息さえ満足に知ることができなかつ

た人たちの実態はほとんど知られてい

ない。こうした人たちの暮らしに光が

当たる機会になる」と支援者や研究者

は期待を寄せている。

議位をめぐる議論が本格化する中、

両陛下の海外御訪問は、これが最後と

なる可能性もある。国民のために祈る

だけでなく、政治や経済を超えて人と

触れ合い、心を寄せる「象徴」としての務めを、見事に果たされている。

●残留日本兵家族の訪日

この10月、残留日本兵の子供たちが、

日本に住む親戚との交流や父親の墓参

のために来日する。

ベトナムでの残留日本兵の妻子の存

在は、これまでほとんど知られてこな

かったが、今年両陛下がベトナムを御

訪問された際、両陛下と家族との面会

が実現したことから、注目を浴びるよ

うになった。

支援者の協力を得て、日本財団の招

きで、元日本兵の子供ら14人が参加す

る。中には、生存している妻もいるが、

体調不良のため参加者はいない。

参考：第1次インドシナ戦争

日本の敗戦後、ベトナム支配を復活

させようとしたフランスと、ベトナム

独立同盟(ベトミン)の戦争。フラン

ス領だったベトナムに侵攻した日本軍

が1945年8月に敗戦すると、

ホー・チ・ミン率いるベトミンが蜂起

し、ベトナム民主共和国の独立を宣言。

フランスはこれを認めず戦争に発展

した。54年にジュネーブ協定が結ばれ

終結したが、北緯17度線が軍事境界線

となり南北が分断された。

御身体の衰えを感じられながらも、

激戦地への慰霊の旅での御言葉には、

日本人が忘れてはならない歴史と平和

への強い思いが込められていた。

また、慰霊だけでなく、さまざまな

事情で海外に出てその地に留まった日

本人と家族に、長年心を寄せられてき

た。昨年1月にフィリピンを公式訪問

された際も、陛下の強い希望で、日系

人と懇談されている。

昨年8月の譲位の御気持ち表明後、

初めてとなった天皇、皇后両陛下のベ

トナム御訪問(本年3月)は、多湿で

35度を超える暑さの日もあったが、

先々で「予想以上」の歓待を受けられ

た。ベトナム中部の古都フエでは、空

港から宿舍までの約16km、ほぼ途切れ

ことなく沿道で地元住民が両陛下を

出迎える光景が見られた。

地元紙は連日、写真付きで両陛下の

御動静を報じた。それは両陛下が日本

国内と同様、分け隔てなく人と触れあ

う「不偏」の姿勢を示されたからでも

ある。

今回の御訪問は、先の大戦をめぐる

慰霊を目的としたものではなかった

が、友好親善を深めるとともに、日本と

日本人の足跡を再発見する旅となった。

フランスからの独立を目指した戦い

で武器を取った残留元日本兵の存在

は、後にベトナムが主戦場となる東西